

説教題： 活かされる人生

聖書箇所： ヤコブの手紙4章 1節— 10 節

得られないのは、願い求めないからで、願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。神に背いた者たち、世の友となることが、神の敵になることだとは知らないのか。世の友になりたいと願う人はだれでも、神の敵になるのです。

讚美歌521番(イエスよここに宿りてわれを宮となしたまえ) 536 番(むくいをのぞまでひとにあたえよ)

北ヨーロッパに 12 世紀頃からベギンと呼ばれる女性たちが登場しました。彼女らは、貴族の出身でないが故に正規の修道女になれなかった女性たちでした。彼女らは、それでも修道女のような生活を目指して、10 人から 20 人くらいの共同体を作って、ベギン館と呼ばれる家で共同生活をいたしました。元気な者は外へ働きに出てその収入をプール制にして共同生活を営みました。病弱などの理由で働けない者は祈りによって、その共同体を支えました。なお、なぜ彼女らがベギンと呼ばれたかについては、これもまた諸説があって決着していません。その中でも有力と考えられる説は、彼女らのかむっていたベールがベージュ色をしていたからというものです。このベギンが登場した背景についても諸説があって、決着していません。その中でも有力なのは、十字軍の影響で男性人口が減り、未婚女性が余ったからというものです。結婚せずに生きる道を求める女性たちがベギンという生き方を求めたというのです。私も研究者の一人として、この説をやはり重要なものと考えています。

さて、このベギンたちは、言わば中世後期のキャリアウーマンと言うことができるかと思いますが、彼女たちが選んだ職業が本日の説教で重要です。

その仕事とは、織物業をベギン館で営んだり、ビール醸造業者やパン屋、ろうそく屋、印刷屋などに働きに出たりした他、子供に初歩的な読み書きを教えたり、捨て子やストリートギャングの世話をしたり、救済院での病人看護、死者のための祈りと通夜、埋葬の手伝い等でした。

ベギンたちは、例えば織物業でよい製品を安く提供したので世俗のギルドから妬まれたほどでした。その事実は、彼女たちがキャリアウーマンとして如何に実力を持っていたかを示しています。しかし本日注目したいのは彼女たちが病人を看護した点です。ですから、ベギンは、『看護の歴史』などという書物にも登場しています。ベギンたちは病人に奉仕していたのです。

織物業などで得た収入で共同生活を営みながら、一緒に暮らしているベギンの中から、病人の看護に何人かを送り出していたのです。そして、最近の研究で明らかにされたのは、病人の中でも中世においてレプラと呼ばれていたハンセン病患者をベギンは特によく看護していたという事実です。これは、ベギンに特徴的なことだというのです。1249年生まれの一遍上人という人がいます。踊念仏で有名な時宗の開祖です。彼の活躍の様子を描いた一遍上人絵図というのがありますが、その中にハンセン病患者が描かれています。一遍がハンセン病患者に接したのは、ちょうどヨーロッパでベギンがハンセン病患者の看護に向かっていた頃です。ただ一遍は、ハンセン病患者に向かつてその病を罪の故として、仏に許しを請うようにと薦めたそうです。ここに、一遍の時代の子としての限界が感じられます。それに引き換え、ベギンたちはレプラとして虐げられていた人々をただただ愛深く看護いたしました。

さて、先程お読みいただきましたヤコブ書の言葉で、本日特に取り上げたいのは 3 節と 4 節です。まず、3 節に曰く、「願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。」

自分の楽しみばかりを求める人生の空しさを語って、余りあるみ言葉です。世の中には、「自分の楽しみばかりを求める人」が満ちています。それこそ、「世」です。だから、4 節も重要です。

「神に背いた者たち、世の友となることが、神の敵になることだとは知らないのか。世の友になりたいと願う人はだれでも、神の敵になるのです。」

世の友となる生き方は、神の敵だというのです。ここで、イエス・キリストの言葉がすぐに思い浮かびます。マタイによる福音書6章24節に曰く、

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

イエス・キリストは、どんな人間も憎むことはされませんでした。いかなるひどい人間も、悪魔呼ばわりしませんでした。しかし、富だけは神と敵対するもの、すなわち悪魔だとされました。私たちが富を自分の楽しみのためにだけ用いようとするとき、富と言う悪魔のとりこになっています。食欲に富を求めて、自分のためにだけ用いて楽しもうとばかり考える人生の、なんと空しいことでしょうか。私は、ベギンという生き方が北ヨーロッパに生まれた動機は、正しい動機だったとつくづく思います。修道院に入れず、結婚もせず、娼婦になる気もない女性たちは、どうすれば自分たちが生かされるかを考えたのに違いありません。その時、彼女たちはベギンという生き方を選びました。彼女らは共に暮らしている人々の幸せを考え、また虐げられているハンセン病患者の幸せを考え、そのために自分が用いられるように神様に願い求めたに違いありません。だから彼女たちは用いられました。彼女たちは「自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求める」ことをいたしませんでした。

ここで、関西学院神学部の私の二人のすばらしい後輩を紹介させてください。このお二人は、私が大学院生の頃に学部におられた方々です。

お一人は、宮川慎一さんです。私が大学院の2年のとき確か学部の1年生だったと思います。その後、20年も経って福岡女学院教会で出会いました。彼は福岡徳洲会病院の医師になっていました。彼は、神学部卒業後、医学部に入りなおし、医者になっていたのです。私は、あのアルバート・シュヴァイツァーみたいだと思いました。また、『世界の中心で愛を叫ぶ』を書いた片山恭一という作家は、彼の高校時代の同級生だそうです。それはともかく、宮川さんが神学部卒業後、徳島大学医学部に入りなおされたのは、中学時代に郷里愛媛県宇和島出身の大先輩で、あのネパールで働かれた岩村昇先生の講演を聞いて感動したからだそうです。彼はこの8月27日に福岡中部教会で派遣祝福式を受けた後、妻の理世さんと共に3年間の任期でバングラディッシュ東南部のチャンドラゴーナに派遣されました。派遣元はJOCS (Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service) すなわち日本キリスト教海外医療協力会で、岩村昇医師や中村哲医師を派遣したNGO団体です。宮川さんは、中学時代以来、この奉仕活動のために準備してきたこととなります。彼をして海外医療のために働きたいという願いの成就に導いたものは、一体何だったのでしょうか。それは、癒し主であり救い主であるイエス・キリストへの彼の感謝だと私は思います。彼がいつ洗礼を受けたのか私は知りませんが、彼は自分が癒し救われたことをきっと忘れていないのです。そして何よりも彼は、「自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求める」ような人生の空しさに気づいておられるのでしょうか。

もう一人は、奥田知志さんで、日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師です。彼も確か、私が大学院生の頃に学部におられた方です。彼は、神学部時代の大阪の釜ヶ崎での奉仕活動の経験から、現在、特定非営利活動法人北九州ホームレス支援機構の代表をしておられます。彼は、ホームレスの人たちとの信頼関係の中から彼らに必要な支援とはなにかを見つけたそうとしておられます。

自分では何も出来ていないのに、後輩のことなど申して、恥ずかしい限りですが、私は、奇しくも後輩の素晴らしい奉仕活動に接して、本当にうれしゅうございます。彼らのことを思うにつけても、そして、中世のベギンたちのことを思うにつけても、何よりも必要なのは自分が「活かされ」るような、「正しい動機」に目覚めることだと気づかされます。そして、他でもない私自身が、神様に活かして用いられる存在となりたいと願います。おいしいものを食べて、良い服を着て、きれいなところに住んで、死んだときに人々から「あの人はエゴイズムの塊だった」などといわれる人生だけは送りたいものではないのです。

【祈り】神様、どうか私達に「自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求める」ような人生に別れを告げさせ、私達一人一人をあなたのために活かしてお用いください。この祈り主イエス・キリストのみ名によってみ前にお捧げいたします。